

## 日露戦争とドイツ帝国海軍 - パーセプション・教訓・露呈したジレンマ -

ベルトホルド・ザンダー＝ナガシマ

### 日露戦争前夜におけるドイツ帝国海軍

#### 組織について

日露戦争前夜におけるドイツ帝国海軍の管理および指揮に関する組織は、帝国海軍省（Reichsmarineamt）、海軍軍令部（Admiralstab）、および帝国海軍局（Marinekabinett）の3つに分かれていた。アルフレッド・フォン・ティルピッツ提督率いる海軍省は、艦隊の建造、修理、および装備についての責任を有し、また議会においては予算を確保する役割を担っていた。ヴィルヘルム・ビュッセル提督率いる海軍軍令部のその主な責務は、第一戦隊司令部や艦隊司令部が実行する作戦の立案であり、戦術の発達について皇帝ヴィルヘルムに提言する役割も担っていた。バルト海司令部や北海基地も、ウォー・ゲームや演習を通して海軍軍令部に協力した。海軍軍令部は、海軍の他の部門が艦船、計画、人員の形で提供したものを実際に活用する部門であり、ティルピッツは海軍軍令部と艦隊を合わせて「前線」と呼んだ。グスタフ・フォン・センデン＝ピブラン率いる海軍局は人事を担当した。これら3つの部門は、それぞれ皇帝と直接謁見する権限（Immediatrecht）を有した。それゆえ各部門が重要な案件で合意に達しないと問題が複雑化した。さらに厄介なことに、またそれぞれの下位部門にも、名目上、同じような権限が与えられていた<sup>1</sup>。

国家の意思決定レベルでは、特に戦争と和平交渉に関する問題になると、宰相、外務省、および陸海軍代表者が主にヴィルヘルムの相談役となった。当時の意思決定者は皇帝であった。議会はこの件に関する発言権を持たず、法律と予算の決議のみにその権能は制限されていた。日露戦争当時、意思決定レベルの主な顔ぶれは、文民のビューローとホルシュタイン、参謀本部のシュリーフェン参謀総長、そして海軍のティルピッツといったところで、ときにビュッセルが加わることもあった。皇帝へ直接謁見ができる特権のしくみは、皇帝が重要な問題、特に陸海軍の問題を最大限支配できるようにするために考案されたものであった。しかし国の近代工業化が進み、複雑さが増す中で、一人の人間がこの種の「個人的支配」を実際に行うこと、また重要な問題を追跡し管理

<sup>1</sup>海軍だけでも、10名もの「直接謁見」特権保持者がいた。Petter, Deutsche Flottenrüstung von Wallenstein bis Tirpitz, p. 220. In: MGFA, Deutsche Militärgeschichte, vol. 5 (VIII).

することすら、だんだん難しくなっていた。言うまでもなく、直接謁見の権利を有する者同士は、理論上同等の力を有していると思われていたため、それらの間には頻りに紛争が持ち上がった。皇帝ヴィルヘルムは専門レベルの解決が求められるこのような紛争の調停をしばしば求められたが、彼はその能力に全く欠けていた。加えて、直接謁見システムには明確な協議手順が存在しなかったため、政治または陸海軍に関連する重要情報の交換がなされず、他部門との作業効率性に多大なる悪影響を与えた。

### ティルピッツ主義の海軍

海軍内の状況も基本的には同じであったが、異なっていたのはティルピッツがその支配に成功したことであった。1897年に海軍大臣となったティルピッツは、マハンの思想に多大なる影響を受け、歴史に「ティルピッツ計画」として名を残す意欲的な仕事に着手した<sup>2</sup>。この計画の根幹は、北海における英国との決戦を想定し、それに勝利できるような戦艦艦隊を建造すること、そして海上における英国の優勢を脅かし、長年にわたる国際社会での主役の座を奪取することであった。また、この計画には内政的な配慮もあった。壮大なドイツ版「世界政策」を標榜し、建艦計画により国内の失業者達に安定した雇用を生み出すことで、国内に育ちつつある不穏な空気を鎮めようという狙いがあった。

北海南部が決戦の舞台となるはずであったため、ティルピッツは建造中の艦が艦隊の主力艦としてその海域に適したものとなるよう腐心した。彼は装甲を強化するため、スピードとある程度の火力を犠牲にする覚悟をしていた。優れた訓練と戦術をもってすれば、それらの犠牲はカバーできるはずであった。よって、巡洋艦と海外での戦いに対する準備の優先度はかなり低く、英国が準備不足のそれらの艦隊に先制攻撃を仕掛けないかと彼はいつも心配していた。1917年までには、戦力を、帝国海軍に英国攻撃への十分なチャンスが生まれる2対3の比率にまで到達させたいと考えていた。それまでは、英国とのトラブルを何としてでも避けなければいけない「危険ゾーン」が続いた。

特に海軍寄りであったヴィルヘルムは、ティルピッツの自由裁量に任せた。その結果として1898年および1900年に海軍法が制定された。ティルピッツの計画に対する国内からの反発に対しては、彼は海軍内のすべての主要な地位に自分が信頼する者だけを配置するという手段で対抗した（彼は水雷艇乗りからそのキャリアをスタートしたため、海軍でも「水雷軍団」と呼ばれたかつての同僚を側近として採用した）。

---

<sup>2</sup> Berghahn, Tirpitzplanを参照。

## 作戦計画

かつて海軍省にてティルピッツの副官を務めた海軍軍令部長のビュッセルもその一人だった。しかし、この新しい地位において戦争計画の立案をしなければならなかったビュッセルは、日露戦争開戦後の戦争の危険が叫ばれたときに困難な問題に直面した。日露戦争開戦直前、海軍軍令部は対露仏同盟作戦（作戦計画 I）、対英作戦（作戦計画 II）、または対米作戦（作戦計画 III）を計画していた。加えて、主に東アジア海域に駐留していた巡洋艦隊をはじめとする海外のドイツ海軍のためのさまざまなシナリオを準備していた。

フランスとロシアに対する作戦として、極東地域におけるロシアの台頭に対抗すべく、ドイツ海軍の作戦立案者はすでに世紀の変わり目ごろから、バルト海で優位に立つことを目論んでいた。できるだけ早くバルト海を支配し、艦隊で陸軍の作戦を支援するのが狙いだった。そこで厄介な問題となるのがフランスだった。ドイツはフランスに対してシュリーフェンが望むような攻勢を採るに足る力があるとは考えられていなかったからである。しかし 1903 年ごろには、海軍軍令部は第一戦隊がフランス北方戦隊に対峙するに足る力があるとして、海峡で進攻作戦を実行してダンケルク港を攻撃し、一時的にフランス海軍主力艦隊をプレストに封じ込め、決戦に誘い込む、という計画を提言するまでに至った。作戦立案者たちはこれが本当に実行できるかどうか確信はなかったが、最終的な決断は陸軍によってなされるべきだと考えたため、注意を深く払わなかった。三国同盟の一員であるイタリアはおそらくその責務を全うすることができないとの外務省の見解を無視し、海軍作戦立案者たちは依然として、同盟国であるイタリアを引っ張り出し、地中海にてフランスに対抗させることを想定した作戦を計画していた。1903 年初頭、ビュッセルはヴィルヘルムから作戦計画 I への合意を得た<sup>3</sup>。

世紀の変わり目ごろ、圧倒的に優位を誇る英国との戦いの計画を練るにあたり、海軍軍令部が第一番目に考慮したことは、ドイツ艦隊が厳密なる防御態勢を採るということだった。ドイツの艦艇はエルベ河口に展開し、北海で予想される英国の封鎖作戦への抵抗は最小限にとどめ、必要に応じてカイザー・ヴィルヘルム運河を経由してバルト海の封鎖を破ろうという目論見だった<sup>4</sup>。ヴィルヘルム運河を活用すると防御側に有利に働くという考えは、ビュッセルの前任者の一人がすでに考案していたものだった<sup>5</sup>。英国は北海とバルト海との間で戦力を分散する必要があったので、この運河を使用すれば、防御側は戦力を集中でき、2つに分散した英国艦隊の弱い方（おそらくバルト海の出口

<sup>3</sup> Berghahn, Tirpitzplan, p. 332; BA-MA F 5996 Büchsel to A, 10.03.1903.

<sup>4</sup> BA-MA, F 5587, Vorarbeit für einen O-Plan Deutschland allein gegen England, 11.1899.

<sup>5</sup> Ibid., Die Defensive gegen England, 11.1899.

付近にいる戦隊)に損害を与え、あわよくば撃破することができるはずであった。バルト海でそのような作戦を展開するにはベルト海峡を支配することが必要不可欠だったが、それにはデンマーク側からの海峡の安全確保を必要とした。デンマークが自らその中立性を放棄するとは考えられていなかったの、そこで必要となるのがドイツ陸軍の協力だった。しかしながら、こうした陸軍の協力に必要な2個軍団を確保できるか否かは、シュリーフェンが英国に対して戦いを挑めばフランスかロシアがイギリスの協力国としてすぐに参戦してくることは必至だと考えていたことによって、いつも議論の焦点となった<sup>6</sup>。すなわち、これは、陸軍部隊の協力がなければ海軍が望む防衛が実現不可能であるということで、ヴィルヘルムは、対デンマーク作戦に対する陸軍による支援の問題について詳細に調査するよう指示を出したが、海軍は日露戦争が勃発するまで、対英策戦(作戦計画II)に関する具体的な作戦計画を事実上打ち出せずにいた。

対米作戦への計画が浮上したのは、1899年から1900年初頭にかけてであり、主なきっかけはサモア危機だった。そのとき、アゾレス諸島を經由してアメリカ大陸東岸にドイツ艦隊を展開し、攻撃拠点を設けるという案が考え出された。東岸を封鎖することは不可能と思われたが、陸軍からの支援があれば、決戦にもちこんで米国艦隊を打ち破り(約1ヵ月かかると見込まれていた)、ニューイングランドのいくつかの都市を掌握することは可能と思われた<sup>7</sup>。カリブ海およびケープ岬での拠点確保も考慮されたが、これらはまず、陸軍によるボストンとニューヨーク進攻作戦がうまくいった上でのことであった。ここで障害となるのは、どのようにして陸軍部隊を輸送するかだった。シュリーフェンは当初、少なくとも10万人の兵力が必要と試算したが、義和団の乱の際の中国遠征の経験から判断して、実際に船で輸送できるのは、そのうちのほんのわずかであることが分かっていた。海軍軍令部の作戦立案者は、そのような作戦は成立しないことをすぐに悟った<sup>8</sup>。しかしこの作戦が保留となったのはごく一時のことで、ベネズエラに対する海上封鎖にドイツが参加した際、米国がこれをモンロー・ドクトリンに違反すると抗議したことから、1903年には再びこの作戦が俎上にのせられた<sup>9</sup>。ヴィルヘルムの合意を受け、ピュッセルは陸軍の支援をシュリーフェンに要請し、1903年11月までには、「作戦計画III」構想が完成した。これは西インド諸島地域、望ましくはプエルトリコを掌握し、米国艦隊をカリブ海で撃破し、アメリカ東岸、特にニューヨークを主

<sup>6</sup> BA-MA, F 5586, Schlieffen to Büchsel, 06.08.1903.

<sup>7</sup> Herwig, Frustration, p. 51.

<sup>8</sup> BA-MA, F 5174b, Schlieffen to Diederichs, 14.12.1901.

<sup>9</sup> Lambi, Navy and German Power Politics, p. 186.

眼とした作戦を展開するというものだった<sup>10</sup>。後に、カナダを標的とした作戦も考案された。

戦争状態に突入した場合に、青島を基地としているドイツ巡洋艦戦隊を動員するという計画は、優先順位としては概して低かった。なぜなら、欧州諸国との戦いの場合は欧州海域が、米国との戦いの場合はカリブ海が決戦の舞台になると考えられていたからである。唯一の例外は対日戦であったが、それが勃発する可能性は極めて低いと思われた。その上、極東に展開していた戦隊は、他の大部分の国の戦隊と比較しても見劣りするものであった。巡洋艦戦を実施するにも陽動作戦を実施するにも、東アフリカ、オーストラリア、および西アメリカ近海に駐留するドイツ海軍部隊をできる限りかき集め（たいいてい小型艦が散在しているのみであった）なければ何もできなかった。そのありえない日本との戦争として、1904年2月、青島の戦隊は日本の港を攻撃するよう指示されたが、その後、兵力を引いて青島防御のための任務に当たるよう指示が変更された<sup>11</sup>。

## 日露戦争に対する初期の反応およびドイツ観戦武官からの報告

1904年2月上旬の日露戦争勃発は、ドイツ海軍にとって晴天の霹靂であった。冬の間は日本とロシアは戦争状態に突入しないだろうと予想していたからである<sup>12</sup>。しかし一旦戦いの火蓋が切られると、ヴィルヘルムはすぐにドイツ海軍駐在武官を両交戦国の司令部に派遣し、報告の任に就かせるよう命令した。すでにサンクト・ペテルスブルグと東京にはそれぞれヒンツェ少佐とトルムラー少佐が駐在武官として赴任しており、さらにホップマン少佐とギルゲンハイム大尉を旅順に派遣した<sup>13</sup>。彼らは海軍軍令部を通じてヴィルヘルムに直接報告する任務を負った。皇帝は状況報告だけでなく、近代的な艦艇に対する近代兵器の効果を観察し、戦術や近代化した戦隊、艦船、水雷艇などの運用についての意見も提出することを要求した。また装備を含めた大部隊の輸送や上陸の実施、および陸海軍間の責任分担についての報告をまとめ、海軍部隊の艦船と人員の効果についての詳細な検討も求めた<sup>14</sup>。加えて巡洋艦戦隊は、単艦で何が起きているのかを努めて中立的に観察するよう指示された<sup>15</sup>。

<sup>10</sup> Herwig, Frustration, p. 85ff.

<sup>11</sup> BA-MA, F 2017, Büchsel, Zum Immediatvortrag, 12.02.1904.

<sup>12</sup> BA-MA, RM 5/5763, Zum Immediatvortrag. Hat der Beginn eines Krieges mit Russland im Laufe des Winters für Japan Vorteile?, 05.12.1903.

<sup>13</sup> BA-MA, RM 3/2593, Vermerk, 05.03.04 and Ibid., RM 5/5764, Vermerk, 13.03.04.

<sup>14</sup> BA-MA, RM 3/2593, Anweisung für die zum Hauptquartier der russischen oder japanischen Streitkräfte entsandten Seeoffiziere, 13.02.04.

<sup>15</sup> BA-MA, RM 2/1768, Büchsel to Wilhelm, 27.02.04.

開戦前夜、トルムラーがときの海軍次官であった齋藤実に対し、日本艦隊の作戦遂行についての情報をどのように、また、どの程度入手できるかを尋ねたところ、外国の駐在武官に対して戦況情報を提供する任務にあった財部彪中佐を紹介された。トルムラーと財部との最初の会見はあまり友好的なものではなく、提供される情報も極僅かで、その情報の確かさを判断することもほとんど不可能であったとトルムラーは不満を記している。したがって、彼は専ら公式発表に頼らざるを得なかった。一方、彼の報告書によると、同じ任務についていた英国海軍のトロウブリッジ大佐は、開戦の直前に佐世保海軍基地に向かい、「公然の秘密」として日本の戦艦「朝日」に乗艦していた。トルムラーが同様の許可を求めたところ、今は無理だが後日なら可能かもしれないという回答を得た。しかしその直後、外国人駐在武官による乗艦は許可できないとの政府からの談話が発表された<sup>16</sup>。結果として、この戦争に関してトルムラーが報告できた重要な情報は限られたもので、1904年6月に捕獲船「満州丸」に乗船して訪れた作戦海域への駐在武官・新聞特派員向けの小旅行についての表面的な印象をまとめる程度であった<sup>17</sup>。彼にとっておそらく最も収穫があったのは、1904年9月に横須賀のドックで、機雷で傷ついた巡洋艦「千代田」を視察する許可を得たときぐらいのものであった<sup>18</sup>。

一方、サンクト・ペテルスブルグで同じ駐在武官の任に就いていたヒンツェは、トルムラーと比較するとかなり良い待遇を受けていた。この戦争中、彼はロシアの高官や極東から帰還した士官との会話の中から、重要な情報を終始得ることができた。こうして、彼は比較的早い段階で、この戦争におけるロシア海軍の考えを報告できた。その考えとは「欧州からの増援部隊が到着して合流するまで、太平洋艦隊をできるだけ長く温存する。もし増援部隊の合流が果せなかった場合は、日本海軍に対して何らかの攻撃を仕掛ける」というものであった。しかし、ロシア軍はその結末について驚くほど危機感がないように見えた。ロシア側は、日本艦隊がいずれにせよ何らかの損害を受け、ロシア海軍の残り半分に対抗する力は残らないと踏んでいた。海上での優勢はいずれにせよロシア側にある。そうなればロシア陸軍の勝利も必要ない。日本軍は供給を断たれて遅かれ早かれ降伏する。もしそのとき日本軍が朝鮮へできるだけ多くの部隊を輸送していれば、それだけロシア側に有利になる。一方、このようなシナリオが現実化すれば、ロシア海軍の海上での優勢が明らかになり、英国政府がこれに介入しないかどうかを判断しなければならぬ状況が発生するのではないかとヒンツェは懸念した<sup>19</sup>。また、これもヒンツェとロシア海軍との良い関係を示すものだが、1904年4月にヒンツェがロジェスト

<sup>16</sup> BA-MA, RM 5/5765, Betrifft: Auskunftserteilung im Hauptquartier der japanischen Flotte, 03.03.04.

<sup>17</sup> BA-MA, RM 5/5772, Teilnehmerliste an der am 12. Juni beginnenden Kriegsfahrt der "Mandschuria", 12.06.04.

<sup>18</sup> BA-MA, RM 3/4305, Bericht Nr. 13, 28.09.04.

<sup>19</sup> BA-MA, RM 5/5766, "Stimmung und Pläne", 01.04.04.

ヴェンスキー提督に対し、極東に向かう戦艦に同乗させてほしいと遠巻きに願い出たところ、提督は彼の手を握り締め、その申し出についての喜びの気持ちを繰り返し述べただけでなく、出航予定日まで教えてくれたのだった<sup>20</sup>。戦争終結直前には、ヒンツェは日本海海戦での壊滅的敗北についてのロシア海軍が行った分析結果という極秘情報をも報告することができた<sup>21</sup>。

しかし、最も興味深い報告書を残したのはホップマン少佐であろう。彼は戦いの現場にいたため、交戦国両サイドから得た印象をまとめてそれを報告することができた。海軍軍令部所属でロシア語に秀でたホップマンは、巡洋艦戦隊所属のギルゲンハイム大尉と共に、1904年3月中旬、旅順口のロシア海軍司令部への駐在武官に任命された<sup>22</sup>。1ヵ月後、彼らは初めての外国人駐在武官として現地に赴任し、日本軍による要塞攻撃が目前に迫った8月中旬まで駐在した。旅順口では彼らは自由に行動でき、望む通りにロシア人士官と話すことも、ロシア艦の損害を視察することもできた。また、ドイツへ送る報告書への検閲はなかった。いよいよ旅順口から脱出するよう命令されたとき、両名はそれぞれ中国帆船（ジャンク）を調達し、海から脱出した。ホップマンは途中日本の水雷艇に捕えられ、日本の軍艦で青島まで連れて行かれ、そこからドイツに帰国した。一方、ウラジオストックに向かい、引き続きこの戦争についての報告を続けるよう指示されたギルゲンハイムは不運だった。彼は自ら雇った中国の船員に殺害されてしまったのである。

ホップマンの報告書を見ると、明らかに意見が変化していく点が興味深い。はじめ彼は、日本艦隊は低水準であるとの情報について触れた上で<sup>23</sup>、ロシア戦艦「ペトロパブロフスク」が触雷により沈没し、マカロフ提督が死亡したことでロシア側に大きな衝撃が走っていたにもかかわらず、ロシア艦隊の優越性について、ロシアの司令官らと同じように楽観的な見方をしていた。「彼らは、間違いなく、自らの士気と、艦隊の能力に絶対の信頼を持っており、また特に日本人よりも体格的に優れていることを力説している<sup>24</sup>。」旅順口に到着した最初の日、ロシア人の冷静な様子は彼の目に好意的に映り、戦艦「ペトロパブロフスク」を失ったことへのロシア人の反応についてこう記している。「ロシア人は必然を受け入れるのが早い。彼らは戦争には辛い犠牲がつきものであると至極当然のように語り、今、艦隊は実質的に麻痺状態だが、バルト海から増援が到着したら断固たる行動をとることができると考え、そのことで安心している。不安や憂鬱の

<sup>20</sup> BA-MA, RM 2/1768, "Einschiffung", 25.04.04.

<sup>21</sup> BA-MA, RM 5/5784, "Ursachen der Niederlage von Tsuschima", 28.08.05.

<sup>22</sup> BA-MA, RM 5/5764, Wilhelm to Büchsel, 13.03.04.

<sup>23</sup> BA-MA, RM 2/1768, Bericht über Nachrichten auf der Reise von Tschifu nach Tienstsin, 05.04.04.

<sup>24</sup> BA-MA, RM 3/v.19, Bericht Nr. 4, 17.04.04.

痕跡は見られない。まるっきり見方を変えれば、彼らは日本艦隊が将来仕掛けてくると予想される攻撃に対しても極めて楽観的な態度を崩さず、無関心で笑い飛ばしさえもする<sup>25</sup>。」しかし様相は一転した。この記述からほんの数日後、ホップマンは日本艦隊が三番目にして最大の旅順口閉塞作戦を仕掛け、港の入り口を封鎖しようとするのを目の当たりにしてこう記述した。「あの凄まじい砲火の中を、10隻もの蒸気船が平然と進んでいくさまは理解しがたいことである。日本軍の狂信的な攻撃や行動力と、ロシア軍の無気力、無関心とを比較すると、ロシアの先行きはとても暗いように思われる。日本軍には異なる精神が宿っているとは考えられない。……疑いもなく、日本軍の指揮官たちの方が、死を拒む頑健な兵士達を擁するロシア軍の指揮官たちよりも、兵力をどう活用すればよいか知っているのだ。」その日の遅く、ホップマンは日本軍に反撃した砲兵隊を訪ね、士官と会見した。その中にはボリス・ウラディミロヴィッチ大公があり、大公は流暢なドイツ語で、この戦争についてのロシアの前途はあまり芳しくないと言った。「それどころか大公は、日本軍のエネルギーで大胆な攻撃、素晴らしい装備と組織、果敢な指揮と見事な勇敢さを賞賛した。」ホップマンは報告書をこう結んだ。「日本人を一時的に過大評価しているだけかもしれないが、彼らは有能であり、最大の尊敬を勝ち得たのである<sup>26</sup>。」

ホップマンは8月に旅順口を離れたが、このときも日本人に対する偏見がさらに払拭された。小さな帆船で出航した後、ホップマンは日本の水雷艇に捕えられた。その艇がドイツ製であることに彼はすぐに気がついた。その際、周辺でロシア船が発見されたとの知らせによって日本軍は突如警戒態勢に入った。これは誤報であったが、ホップマンにとって活動中の日本海軍の様子を観察する予期せぬ絶好の機会となった。彼は後に、日本人乗組員についてとてもプロフェッショナルな印象を受けたと報告している。

その後、日本の巡洋艦に乗り移り、何人かの士官と会話をした印象としてホップマンは、「教養高い海軍士官たちであり、とても意欲的に、大げさなほどの真面目さで自らの職務に取り組んでいた」と述べている。彼は最終的に日本の軍艦によって青島に運ばれた。そこには8月10日に旅順口からウラジオストックに向けて脱出を図り、失敗したロシア艦が停泊していた。彼は、日本人がこのささやかなチャンスを利用してロシア艦の情報を得たいと思っているのではと感じた。そうしたことから彼は、片岡中将をはじめとするドイツ語を流暢に話す日本人士官たちと会話する十分な機会を得た。ホップマンはこうまとめている。「その印象は、私の抱いていたイメージや予想を何重にも超えていた。ほとんどの士官たちの外見だけをとても、我々が思い描いている『典型的

<sup>25</sup> BA-MA, RM 3/v.19, Bericht Nr. 5, 22.04.04.

<sup>26</sup> BA-MA, RM 3/v.19, excerpt from Hopman's letter, 04.05.04.



な日本人』像に重なる部分は少ない。彼らの行動を見、彼らと会話していると、自分がヨーロッパ人の中にいるような錯覚を覚える。彼らの何人かは、海軍や海事に関する事柄を語るだけでなく、哲学や宗教や芸術にも触れたが、その視点が理性的かつ適切であることに驚いた。彼らが尋ねること話すことすべてに、完全性や成長への強い意欲が感じられ、それは勤勉性と鋭敏さによって支えられていると見受けられる。緒戦での勝利から自信過剰になっている様子もあったが、敵国を軽率にも過小評価するような発言は一つもなかった。それどころか、この戦争はこれから先も長期化し、日本側に多くの労力と犠牲を強いるだろうという意見を聞いた。一部の士官の中には、ドイツを訪れたことがないにも関わらず、ドイツの精神に強く共感している者もいた……<sup>27</sup>。」極東に赴任した当時、ホップマンはロシア側の優勢と早期の勝利を確信していたが、両国を観察して意見が大きく変わった。彼の報告書は、この戦争に関する海軍軍令部の刊行物が示すとおり、ドイツ帝国海軍の首脳陣の視点に大きな影響を与えた。

#### 技術的教訓 - 海軍省による評価 -

この戦争が終結するかなり前、日本海海戦もこれからというときに、ティルピッツはこの戦争から技術的教訓を入手して、彼の建艦計画に役立てたいと熱望していた<sup>28</sup>。そこで彼は、海軍省の各部門長に対し、1904年11月中旬の時点までに得られた教訓について資料を作成するよう命じた<sup>29</sup>。彼が理想とする艦隊の戦艦に関して一番重要視していたのは装甲の問題であった。彼は、主要な検討課題として、装甲のない上部構造を排除することや、司令塔を砲弾の破片に耐え得るよう改良することを挙げた。これらの点については新しい艦の設計に生かそうとしていただけでなく、「カイザー級」や「ブラウンシュヴァイク級」といった既存の艦でも改良を加えるつもりであった。砲弾が喫水線下に命中し、浸水により、その後、船体に損害を与えるというケースも多く見られたため、ティルピッツにとって新しい艦での喫水線下の装甲強化も課題であった。技術的教訓の暫定的調査における4番目の重要なポイントは、戦闘時に船のスピードを大きく減殺してしまう原因となりうる煙突部分への損害を、海上で修復する方法であった。技術的教訓についての包括的な草案作成は組織内部で極秘に行われ、1905年3月、極秘文書“Erfahrungen und Folgerungen aus dem russisch-japanischen Kriege für den Bau und die Armierung von Kriegsschiffen”が完成した<sup>30</sup>。機雷が両陣営にもたらした多大な

<sup>27</sup> BA-MA, RM 3/6845, Bericht Nr. 20, 26.09.04.

<sup>28</sup> BA-MA, RM 3/2594, Tirpitz to department heads of Naval Office, 21.10.04.

<sup>29</sup> BA-MA, RM 3/2596, Protokoll der Sitzung vom 15. November 1904, 15.11.04.

<sup>30</sup> BA-MA, RM 3/4314, Dienstschrift der Kaiserlichen Marine Nr. LXII. Erfahrungen und Folgerungen aus dem

る損害を考慮して、ドイツ海軍の分析官たちは艦隊に独立した機雷処理部門を創設すること、特にこの目的に適用させた艦艇の建造が必要であると考えた。触雷すると、大型艦であっても大抵は大きな損害を受け、小型艦などは、極少数の例外を除いて沈没してしまっていた。一方、魚雷はドイツの分析官たちを失望させたようであった。報告書によると、魚雷による攻撃が実質的に成功したのは、1904年2月8日の夜に旅順港外に停泊していた無警戒のロシア艦隊を、日本の駆逐艦が攻撃したときのみで、そのとき発射された魚雷の中で命中したのはたった3発（ドイツ軍の予測では20発）であった。彼らはしかし、このわずかな事例で結論付けてしまうようなことはせず、戦闘における魚雷の有効性をより正確に評価するためには、より詳細にわたる情報が必要であると述べている。水面下における砲弾直撃の問題は大きな関心を呼び、独自に実験を行うことが直ちに決定された。そして、計画中または目下建造中の主力艦についても水面下部分の装甲を強化することが確認された。

「ドレッドノート時代」前夜においてかなり興味深い点は、長距離砲の効果についての評価と、それに対して海軍省が出した結論である。彼らによると、長距離砲は、それが船体に命中して戦闘の継続を実質的に不可能にするという物理的な効果はなかったが、相手の士気をくじくという面においてより大きな効果を発揮したということであった。これは、特に旅順港のロシア艦隊がウラジオストックへの脱出に失敗した8月10日の事件を評価したもので、彼らは冷めた目でこう記している。「8月10日、ロシア艦隊は物理的というより精神的に敗北した。物理的戦闘能力がまだ目立って損なわれていないうちにロシア艦隊の隊形はバラバラになってしまった。だがここで、長距離砲が精神的に特別な効果を発揮するという説を一般化するのは誤りであろう。この戦闘においても、戦争全体においても、このときのロシア艦隊の行動を典型的なものだとは誰も思わないはずだからである<sup>31</sup>。」これはドイツ人技術者がロシア艦隊旗艦「チェザーレウィッチ」の損害を視察しての結論だった。当艦は8月10日の戦闘の後、青島に逃れたが、ドイツ人技術者が見たところ、その兵器も、推進機関も、制御機関も全く損なわれていなかった<sup>32</sup>。この文書の目的は技術分析であったが、ロシア軍の質と彼らが海上で示した能力に関する評価は、日本海海戦の悲劇を待たずして、このときすでに極めて低いものだったのである。

艦の種類については、海軍省の分析官たちは一致して、艦隊においては戦艦が重要な要素となると結論付けた。分析官によると、日露戦争によって戦艦の砲力と装甲に関し

russisch-japanischen Kriege für den Bau und die Armierung von Kriegsschiffen, 22.03.05.

<sup>31</sup> Ibid., p. 14.

<sup>32</sup> BA-MA, RM 3/2596, Bericht über Beobachtungen auf "Cessarewitsch" und Torpedobooten in Tsingtau, 01.09.04.

て2つのことが明らかになったという。「1. ....敵の撃滅はすべての戦闘行為における目標であり、達成されるべき事柄であるが、これは長距離砲のみでは不可能である。この事実に加え、結局のところ敵国が必死になれば大型艦とて近距離戦は避け難いことから、近距離兵器への取り組みが決定的に重要になることは明らかである。戦艦の砲力は.....この点に完全に適応するものでなければならない。さらに、兵器、推進機関、制御機関が完全な状態で接近戦に臨めるよう、戦艦の装甲はそれ相応に固めなければならない。2. ....戦闘のいかなる局面においても砲撃を中断してはならない。連続的に多数命中させてこそ砲撃の効果は最大限発揮されるからである<sup>33</sup>。」このような結論から、装甲巡洋艦の建造を推奨したり、大型巡洋艦を戦闘ラインへ組み込むというその時代のアイデアは却下され、興味深いことに、28センチ砲を12門備えた、ドイツ版「ドレッドノート級」とも言える「ナッソー級」が建造されることになった。この艦載砲は日本軍のものよりもさらに小さいものであったが、接近戦において多大な効果を発揮するのに十分な威力を持っていた。ドイツ海軍は、視界の悪い北海においては特にこれが有効であると考えていた。

海軍省の分析官から見て、戦艦への攻撃において水雷艦艇がその役目をほとんど果たしていなかったことから、彼らの反教科書的な発想はさらに裏付けられる形となった。だからといって、水雷艦艇が全く使えないと考えているわけではなかった。彼らは、水雷艦艇の問題は、適切な組織立てと訓練の欠如にあると指摘した。ロシア側の例を挙げると、彼らは一般的に戦術的な訓練および乗組員の育成を怠っていた。水雷士官のほとんどが、以前に魚雷を1発も発射した経験がないという有様だった。日本側となると話は別で、日本海軍がより高度な訓練と組織立てをしていたと海軍省の分析官は認める一方で、水雷艦艇が十分に効果を発揮し得なかったのは、訓練と実戦の格差、魚雷の効果についての考え方の誤り、および魚雷自体の不具合の結果であるとした。ところで、これらの文書で海軍省の分析官が踏み込んだ領域は、海軍軍令部の管轄分野でもあった。海軍軍令部は、この戦争の当事国のパフォーマンスについての次のような詳細な分析をしていた。

## 海軍作戦行動についての海軍軍令部による評価

この戦争中および戦後において、海軍軍令部はあらゆる情報源を駆使して情報の収集と比較分析を行い、特に戦略と戦術における教訓を学び取ろうとしていた。彼らの分析結果は、1906年から1909年にかけてまとめられた3巻の研究報告書という形で結実し

---

<sup>33</sup> Ibid., p. 16.

た<sup>34</sup>。ロシア艦隊については、彼らの評価は明確であった。この艦隊がどの程度即応すべき問題を解決できていたか否かが鍵であり、報告書もこれを「決定的要因」だったとしている。それは彼らの決断力の問題ではなく、主にその無気力と、日本軍への油断の問題なのであった。ロシア海軍司令官の主な仕事は「自らの撃滅の危険を冒してでも、攻撃すべきときはいつで、またその場所はどこか」という問いに答えることであるべきだったというのが、分析官たちの意見であった。しかし、この問いがロシア側で提起されることは遂になかった。その代わりに指示された、作戦の主な目的は、常に生き残ることであった。ドイツの分析官は、ロシア側が平時における準備においても戦時における訓練においても、艦隊を戦いの道具として満足に使いこなしていなかったことから、各作戦や戦闘を詳細に研究しても無駄であるとまで断じている。「艦隊ひとつをとって見ても、司令官の能力からして、戦争で結果を出す基礎となるすべての要素が事実上欠けており、なぜ彼らがこの行動やあの行動をしなかったのかと問う価値もない。彼らは単にあれ以上のことができなかつたのだという事実だけで十分である<sup>35</sup>。」

ヴィルヘルムが海軍軍令部の評価をロシア側に提供しないように決定した理由は、上記のような評価に起因するのかもしれない。皇帝が公開を許可したのは「編集版」であり、これが後にロシア海軍とニコライに贈られた<sup>36</sup>。

海軍軍令部の分析をすべて記載することはできないので、主要な事項に触れたもののみを紹介することにする。それらは、緒戦における日本海軍による攻撃、日本海軍による旅順港封鎖の試み、戦艦の触雷により両陣営が蒙った損害、ロシアのウラジオストック艦隊による巡洋艦戦、黄海と対馬沖（日本海）における戦いである。

日本海軍の駆逐艦による旅順港夜襲については、太平洋艦隊司令長官スタルク提督が沖での巡視活動による適切な早期警戒措置を怠ったのは失敗だったと評価した。日本海軍に対しては、その大胆な奇襲攻撃を高く評価し、夜間の魚雷攻撃は目的に合った最高の選択肢だったと認めた。しかし、攻撃開始の前に予め偵察艦艇を送って標的を詳細に絞り、第一波の攻撃にすべての駆逐艦を集中させればもっと良い結果が出たであろうということ、第二波では魚雷の発射位置が遠すぎたということを指摘している。たった3発の命中であったが、それはロシア旅順艦隊を麻痺させるには十分で、日本軍は実質的にリスクなく陸上の戦いを遂行することが可能となった。翌朝の東郷平八郎率いる日本

<sup>34</sup> Admiralstab der Marine, Der Krieg zwischen Rußland und Japan 1904-05. Part one (1906): Bis zum Ansetzen des Landangriffs auf Port Arthur im Mai 1904. Part two (1908): Bis zur Kapitulation von Port Arthur. Part three (1909): Die Schlacht von Tsuschima und das Ende des Krieges. 上記3部は非公開の海軍内部文書（“Nur für den Dienstgebrauch”）。

<sup>35</sup> Ibid., part one, p. 143.

<sup>36</sup> これは退役したある提督の仕事だった。Freiherr von Maltzahn, Der Seekrieg zwischen Rußland und Japan 1904 bis 1905, 3 vols. Published between 1912 and 1914.

艦隊による攻撃に関してドイツ海軍が驚いたのは、戦闘中ロシア艦隊の司令官が明らかに艦隊を統率できていなかったということと、さらに前夜の攻撃の後にもかかわらず碇を下ろしたままであったという事実である。敵軍から距離を保ち、要塞砲との戦いを避け、早期に撤退するという東郷の判断については、正しかったと評価している。なぜなら東郷は兵力を温存し、朝鮮での地上戦を援護し、後の決戦に備えなければならなかったからである。国際法を犯して、名目上の中立港であった仁川港のロシア艦を、瓜生少将率いる日本艦隊が攻撃したことについては、分析官はこのようなことはその利益と不利益を注意深く比較検討する必要があるとした上で、「日本が国際法違反を犯したこのケースについて、国際社会は責任を問うことなく見逃した。形式上は許されない行為ではあったが、この攻撃の成功は、この作戦が結局正しかったことを示している。与えられた命令を実行する瓜生少将の決断力と迅速さは、中立を守った指揮官達の抗議にかかわらず、……高い評価に値する<sup>37</sup>」とした。ロシア側については、巡洋艦「ワリヤーグ」艦長は、中立港ゆえに油断したためにその夜早々に脱出できなかったのだと評価し、足の遅い砲艦「コレーツ」を援護に回し、全速力で抜け出せば、無傷で港を離れられたか、少なくとも敵に接近し、損害を与えることができたはずだと述べている。ロシア艦の勇壮な脱出劇についても「戦術的訓練と敵に一矢報いるという決意に欠けているのは明らかで、これはこの戦争におけるロシア艦隊の行動の典型例である。だが、それでもなお、全体から見れば救いとなる出来事だったといえるであろう<sup>38</sup>」と振り返っている。

日本海軍は、1904年2月から5月にかけて3回にわたり、旅順港の出入り口を閉塞船で封鎖し、ロシア主力艦部隊を封じ込める作戦に出たが、いずれも失敗に終わった。ただし、東郷はこの作戦は成功だったと報告している<sup>39</sup>。ドイツ海軍軍令部では、日本海軍は作戦成功まであと一歩だったとし、「日本海軍の試みが失敗に終わったのは、マカロフ提督が死亡したことにより、指導力が失われ、ロシア艦隊が不活発だったことに起因する<sup>40</sup>」と評価している。この意見の中で最も注目になるものは、作戦中、特に最大規模だった3回目の閉塞作戦において、日本海軍将兵たちの示した高い士気と技術の評価したものだ。ホップマンの賞賛の言葉を引用して、彼らは「この作戦は第一級の芸術だった<sup>41</sup>」と記述し、作戦中行方不明となった90名の将兵の内、その死亡の理由は、多くが捕虜になるのを嫌い、自殺したためであり、ロシア軍が捕虜としたのはたっ

---

<sup>37</sup> Admiralstab I, p. 79.

<sup>38</sup> Ibid., p. 80.

<sup>39</sup> Jukes, Russo-Japanese War, p. 28では、東郷は日本陸軍の朝鮮上陸を遅らせないため、意図的にそうしたと記述している。

<sup>40</sup> Admiralstab I, p. 120.

<sup>41</sup> Ibid., p. 118.

た2名の士官と30名の兵士のみで、それらもほとんどが負傷兵だったと指摘している。海軍軍令部のメンバー達は、明らかにホップマンと同じ感銘を受けたようであった。

4月13日にマカロフ提督の旗艦「ペトロパブロフスク」が触雷して沈没し、乗組員のほとんど全員と提督本人が戦死したことに関連して、東郷司令長官は、ロシアの要塞砲からの射程距離外に位置しつつ砲撃の距離を詰めることで、状況をもっと有利に展開できたのではないかと、そして砲撃と駆逐艦による連携攻撃によって、統率を欠いたロシア艦隊にさらに打撃を与えておけば、多大の犠牲を生んだ後の閉塞作戦は必要なくなったのではないかと指摘している。また、マカロフの死について、提督は乗組員達の士気を鼓舞し高めたものの、訓練においては、可能かつ必要なすべてをしなかったと批評している。ロシア側が、港からもっと離れた地点で、巡洋艦と駆逐艦をより積極的に活用していれば、東郷の作戦はより困難になり、彼の乗艦に損害を与えることさえ可能だったかもしれないというのである<sup>42</sup>。

5月15日の戦艦「初瀬」と「八島」の沈没についても、同じように評価している。ロシア艦隊司令官ウイトゲフトは、この機に乗じて日本海軍を主力艦で攻撃するべきであったが、それを怠ったため、絶好の機会を逃してしまったと批判しているのである。

また、この2隻の日本戦艦の沈没は、主に日本海軍が旅順港の懐深くでの閉塞作戦を実行しなかったことに起因しており、これは失敗だったとしている。ドイツ海軍分析官によれば、もっと港の近くで閉塞作戦を行っていたら、マカロフはおそらく港を離れなかっただろうし、日本の戦艦を沈めた機雷も敷設されなかっただろうというのである。

ドイツ海軍の分析官の目にも特別のケースと映ったのは、ウラジオストックのロシア巡洋艦戦隊である。この基地は、特に日本海の海上交通を脅かすのに絶好の位置にあり、地理的な理由と上村司令官に与えられた兵力が不十分であったことから、ここを封鎖することは不可能だった。ロシア巡洋艦の主な任務は、日本と朝鮮の間の輸送を阻止し、日本沿岸を攻撃し、商業輸送を妨害することで、できるだけ多くの日本艦隊を釘付けにし、それによって旅順港のロシア海軍部隊への注意をそらすことだった。6月には日本軍の一部の輸送を阻害するなど、ロシア側の作戦は比較的成功的だった。積み荷の中には、ロシア側より捕獲した鉄道で使用するための米国製の機関車やロシア製のトラックゲージがあり、ロシア巡洋艦による攻撃の成功で、そうした計画も差し当たり不可能となった。しかし、これらは見落とされはしなかったものの、「マハン思想」に染められたドイツ海軍士官によってあまり高い評価を与えられなかった。「このような制海権に基づかない巡洋艦戦では、敵を完全に封じることはできない。妨害効果はあるかもしれない

<sup>42</sup> Ibid., p. 114. practically

が、いずれにせよ瑣末事にすぎない<sup>43</sup>。」彼らはまた、この戦争では、特に巡洋艦戦において、無線連絡が幅広い用途に使用できることが証明されたと指摘している。1904年8月14日、その4日前に失敗に帰した旅順艦隊の脱出劇を支援するために出港していたウラジオストックの巡洋艦戦隊が首尾よく無力化された。その知らせは日本の報道によって熱狂的に伝えられ、歓喜をもって迎えられたが、それに対するドイツの分析官たちの評価はどっち着かずのものだった。彼らは、こうした日本の反応を巡洋艦の重要性から考えて「アマチュア的な過剰反応」と捉える一方、その大きな効果についてもこう記述している。「ウラジオストック戦隊が日本経済に与えた損害は、商船への直接的な損害やその他海上交通への妨害だけではないことを考慮すべきである。日本の造船会社のいくつかは操業の停止を余儀なくされていたし、日本郵船ひとつをとってもこれによる損害は貨物19万トン相当に上っている。日本海北部の沿岸海運は合計60日間停止し、漁業に重大な打撃を与えた。日本の農業にも影響が出ていた。……魚油の輸出は25パーセント低下した<sup>44</sup>。」

黄海海戦は戦争の歴史に新しい1ページを書き加えた。これは洋上において近代戦艦同士が戦ったまさに初めての例だったからである。そのような戦闘に決定的な重要性を置いていたマハンの思想に傾倒していたドイツの分析官たちは、この海戦に特別な関心を持った。彼らはこう記述している。「この戦いや後の日本海海戦から、我々は、……兵器の使用、戦術がもたらした効果、そして、戦艦について多くを学んだ<sup>45</sup>。」この戦いの経過について、第一段階ではウイトゲフトが優勢だったと分析官たちは考えた。このときウイトゲフトはウラジオストックへの脱出に向けて格好のスタートを切った。しかし第二段階で、ウイトゲフトは東郷の主力艦隊に対し、ロシア艦が砲撃するのに最適な射程内に入るのを怠り、さらに部下のそうした提案を却下してしまった。東郷司令長官の戦闘中の決断力に関しては、概して良い評価を与えていたが、旗艦「チェザーレウィッチ」の被弾の後、ロシア艦隊の隊形がバラバラになった際、東郷はロシア艦隊に対して断固とした総攻撃を行っていれば、作戦成功を最大化できたはずだと批判した。しかし一方、これは彼が後に直面しなければならないロシア海軍の欧州からの増援に備え、戦力を温存する必要性から出た判断なのかもしれない、とある程度の譲歩もしている。ロシア側については、海上において戦闘のダメージを一時的に修復する能力が大きく欠けていたこと、そして、訓練の不足と指揮官の指導力のなさを指摘している。「(ロシア側は)戦争に十分に備えていた日本海軍と比較して何か欠けていた。日本海軍は戦

<sup>43</sup> Admiralstab II, p. 34.

<sup>44</sup> Ibid., p. 128.

<sup>45</sup> Ibid., p. 111.

闘中に受けた損害を緊急に立て直す能力があった。ロシア海軍は無気力にも外部からの援助に期待し、一番近い港まで逃げることを選んだのである<sup>46</sup>。」分析官はまた、すべての艦を旅順港または中立港へ引き返させるよりも、まだ航海可能な艦はウラジオストックへそのまま向かわせ、ひどく損害を受けた艦だけを返した方が良かったのではないかと指摘した。「自ら良く考え、自ら行動するよう訓練された士官団では、指揮官は、たとえ明確な命令がなくとも、それぞれ自分達で適宜に行動するものである<sup>47</sup>。」青島に避難したロシアの旗艦「チェザーレウィッチ」を視察したドイツ軍技術者によると、この艦の主砲が発射されたのは、まさしくこの戦闘が初めてなのであった。つまり主砲を用いた事前訓練はゼロだったということだったのである。

また、ウラジオストックにおいてウイトゲフトを援護すべきロシア巡洋艦戦隊の動きを見ても、ロシア海軍の作戦遂行能力の低さは明らかだった。ウラジオストック戦隊は、ウイトゲフト提督が8月10日に港を離れた事実に気づいてもいなかった。メディアでの報道を受けて、やっとジェッセン提督は対馬海峡にいるかもしれないロシア人生存者を助けるために出航した。8月14日には上村艦隊の反撃にあい、巡洋艦を一隻失ったものの、ジェッセンは同僚の旅順艦隊よりももっと高い士気と戦闘能力を見せた。分析官たちは、ジェッセンの善戦について、日本の海上交通路に対する先の作戦の成功と経験が効を奏していたのではないかと評した。

日本海海戦への評価として、まずロシアは戦争当初から、欧州から極東への増援をもっと早くに派遣するようあらゆる努力をすべきだったと指摘した。「しかし早期に増援は送られず、ロシア艦隊の戦争に向けた適切な組織的準備も遅れ、その遅れが作戦に終始影響した。日本海軍に決戦準備の時間を与えすぎたことが、ロシア軍敗退の第一要因である<sup>48</sup>。」また、ロシアの増援艦隊は、東航中に乗組員の訓練を同時に行う始末で、またいくつかの軍艦は新品同様であった。「平時から責任と効率性の観念を教え込まれた乗組員のいる艦のみが、戦闘中に危険を顧みず行動できる。しかしロシア艦隊はそのような勝利への基本に欠けていた<sup>49</sup>。」分析官は、これらの事実を良く認識していたロジェストヴェンスキー提督が、出航の取りやめもしくは艦隊の呼び戻しを提案していた方がよかったと示唆している<sup>50</sup>。たとえ目的地であるウラジオストックに到達できたとしても、この艦隊は日本と朝鮮半島間の海上交通路を大きく脅かすことはできなかったであろうし、ロジェストヴェンスキー自身、勝利の自信を持っていなかったのである

<sup>46</sup> Ibid., p. 116.

<sup>47</sup> Ibid., p. 115 and p. 119.

<sup>48</sup> Admiralstab III, p. 140.

<sup>49</sup> Ibid., II, p. 224.

<sup>50</sup> Ibid., III, p. 143.



から、状況は大きく変わることはなかったのである。ドイツ海軍軍令部は、ロシアがこのような艦隊を戦争の舞台に送り込んだのは失敗だったとし、この失敗により日本は勝利し、和平交渉も日本に有利に進んでしまったと断じた。そして、ロシア海軍の失敗がなければ、この戦争は消耗戦になだれこみ、疲弊した両陣営とも最終的には膠着状態に陥って、陸上での軍事作戦を継続することは不可能だっただろう、と結論付けた<sup>51</sup>。

戦闘そのものについては、ロシア艦隊が対馬海峡へ接近する際、ロジェストヴェンスキーが巡洋艦による偵察行動を実施し、主力部隊の通過の前に敵の哨戒部隊を前もって攻撃しておかなかったことについて批判した。これを怠ったことで、ロシア艦隊は軽率にもその進行方向と居所を知られてしまった。そして、あっという間に日本の優れた近代的中距離砲の餌食となってしまった。軍艦の設計の不備、石炭の積みすぎ、そして指揮官の能力の低さもこの大敗北の原因となった。特にネボガトフ少将の降伏受諾は臆病だったとドイツ海軍軍令部は軽蔑視した。一方日本側は、先に記した砲術の優秀さに加え、艦の速力で勝っており、また、彼らは、砲弾の破片による損害への防御策や怪我をした乗組員の感染症対策など、戦いに備えてさまざまな備えを艦に施していた。日本海軍は、その砲の射撃能力が卓越していただけでなく、隊形の組み替えも平時に十分訓練し、細心の注意を払って実戦に生かし、また無線を最大限活用した。その乗組員については、「戦闘に向けて十分準備していたため」「日本海軍はそれによって我々が目撃した成果を達成」できたのだと結論付けた。ドイツの日本海軍に対する評価の高さは、「命令に忠実であること、全体のために個の生命も犠牲にすること、いざというときには、指揮官は自らの全責任をもって、人命を犠牲にしても作戦を成功させること、海上での仕事への優れた適正、質素であり忍耐力があること」など、「日本人の軍人としての優れた性質」に対する彼らの形容を見ても明らかである<sup>52</sup>。この評価は日本海海戦だけではなく、この戦争全体における日本海軍への評価でもあった。

最終結論として、海軍軍令部の分析官は、日本艦隊の勝利によって、日本は大国の一員となったことは認めたが、極東で念願の主導的役割を演じるだろうということについてはまだ否定的だった。将来を見透かすように、中国やアングロサクソン勢力との対立激化の兆候を読み取っていたのである。日英同盟は更新されていたが、1909年当時、中国大陆での英国の権益をめぐる対立が生じたことで、日英同盟も解消されるのではないかとという噂が持ち上がった。1907年には、日米の対立から、両国では戦争の計画も持ち上がっていた。これはドイツ海軍の分析官たちも知らないことであった。

---

<sup>51</sup> Ibid., III, p. 148.

<sup>52</sup> Ibid., III, p. 168.

海軍省の管轄である艦艇の今後の発展方向に対するこの戦争の影響についても、海軍軍令部は一言いわずにはいられなかった。戦略や戦術の分野と同じく、艦艇の建造においてもこの戦争がもたらした情報に特に目新しいものはなかったが、この戦争の結果、当時すでに進行中の艦艇の発展方向は加速されたと彼らは考えた。「ドレッドノート時代」については、英国が中口径砲を実質的に破棄したことに否定的だった。なぜなら、日露戦争において日本の中口径砲による速射がロシアに多大な損害を与えるのに大いに役立っていたからである。しかし、分析官たちは賢明にもこう付け加えている。「誰しも皆、海戦史から戦訓を読み取るとき、自分の理論に当てはまるものだけに注目する傾向がある<sup>53</sup>。」また、スピードや移動性の向上に加え、機雷攻撃とそれによる損害が戦いを左右したことから、特に船体の水面下部分の装甲強化をこの戦争における重要な教訓であるとした。艦隊を素早く効率的に港に封じ込める手段としての機雷の有効性も、大変重要な情報とされたのである。

海軍史の観点から見て、海軍軍令部は、1866年のリサ海戦以来論争が続いていた主要兵器や艦隊の隊形についての問題は一扫されたと結論づけた。1866年当時には実質的に存在すらしていなかった日本艦隊の「適応能力と学習能力」は、西洋で理論的には準備されていたものを、実行の上、証明したと認められた。マハン派のドイツ海軍士官の目には、戦艦とその伝統的な戦闘隊形について、彼らが以前から正しいと認識していたものが復権したと映った。

### ドッガーバンク事件 - ドイツ帝国海軍のジレンマ -

ドッガーバンク事件に端を発した戦争の危機は、国家の意思決定レベルと海軍内部の双方に影響をあたえた。ロシア第二太平洋艦隊とドイツの民間海運会社が結んだ給炭に関する契約には、日本だけでなく英国もすぐに疑念を抱いた。1週間後の10月中旬、ロシア艦隊は極東に向けて出航し、ロシア艦が英国漁船を日本の水雷艇と誤認して砲撃し、沈没させたドッガーバンク事件が発生した。これによりロシアだけでなくドイツにも戦争突入の危険が生じた。なぜなら英国から見れば、ドイツはロシア艦隊に燃料補給をするなど近い関係にあり、英国の仮想敵国と見なされていたからである。ドイツ皇帝ヴィルヘルムはロシア皇帝ニコライに同盟を申し込み、ニコライはそれに同意していた。一方、ドイツ指導部層で行われたこの問題についての話し合いは場当たりのなものであった。10月末、宰相ビューローが招集した会議への出席者の大多数が、親密な同盟関係にあるフランスと英国に対する「人質理論」を支持した。英国との戦いにおいてドイ

<sup>53</sup> Ibid., p. 184.

ツ海軍は無力と考えられていたので、この場合の選択肢はフランスを攻略することだった。そして、フランスの資源をドイツの戦争遂行のために利用し、この国を和平交渉の際の担保にするという計画だった。ドイツ陸軍は、フランス陸軍と比較してより強力であったため、この計画は有望に思われた<sup>54</sup>。ドッガーバンク事件のほんの数日前、シュリーフェン参謀総長はフランスとの戦いについてその理を説いた<sup>55</sup>。彼はフランスへの積極行動をこり押ししなかったものの、日露戦争はこのような行動へのとても有利な足がかりであると説明し、これに対して文民のビューローとホルシュタインが賛成に回った。ティルピッツはその会議に出席していた唯一の海軍代表者であったが、ロシアとの同盟に反対する少数派となった。ドイツの東側国境は、ロシア軍が日本との戦争のために兵を後退させていたため、何年かは安全な状態になることから、この同盟の有効性を疑問視したのである。何にも増して、そのような同盟は英国の敵対心を増加させ、注目すべき見返りは何もないのであった。英仏同盟軍との戦いにおいて、今までの経緯からロシアがそれほど大きな戦力になるとも考え難く、とりわけ英国と対立することでドイツは「いまだ英国に遅れを取っている海軍のために、外国貿易や植民地を危険にさらしてしまう<sup>56</sup>」のであった。英国との戦争が勃発したら、ドイツは海軍力の強い同盟国に頼らざるを得ず、何よりも「時間を稼いで艦隊の建造を進める」という一番重要な仕事を危険にさらすわけにはいかなかった<sup>57</sup>。多少意見を異にしていたビューセルは、この日の会議に参加していなかったが、おおよそ海軍の意見はティルピッツのものが支配的であると受け止められた。ところが、ロシアと同盟関係を結ぶという問題は、ニコライによって実質的にご破算となった。11月後半、ロシア皇帝は露独同盟に署名する前にフランスに打診したいと言い出したからである。これにはドイツ指導部のほとんどが反対し、この計画は振り出しに戻った。しかし、これにより英国との開戦の兆しが消えたわけではなかった。ドイツ艦隊への先制攻撃を主張する英国の新聞記事に激しく憤ったヴィルヘルムは、ビューセルとシュリーフェンに対し、できるだけ早く英国からの攻撃に備えよと命令し、さらに「人質理論」を棚上げする意思もあることを告げた。つまり、対デンマーク作戦に切り換えるということだった。喜んだビューセルは素早く行動し、シュリーフェンに必要な兵力を整えるよう依頼するだけでなく、機雷を発注したりドック入りしている艦の修理を早めるよう命令して、差し迫った戦争に向け実質的に準備を始めた。しかしこの問題に確信が持てない参謀本部は二の足を踏み、不十分な戦力しか提供しなかった。ビューセルからの苦情を受けて、12月初旬、ヴィルヘルムは陸軍

<sup>54</sup> Heiner Raulff, *Zwischen Machtpolitik*, p. 77.

<sup>55</sup> PAAA, *Deutschland 138 geh.*, Bd.6, Einem to Bülow, 17.10.1904.

<sup>56</sup> Tirpitz, *Erinnerungen*, p. 143.

<sup>57</sup> *Ibid.*, p. 145.

に対し、ビュッセルが要望した2個軍団を提供するよう命令した。また皇帝はその1ヵ月後に、「作戦計画Ⅱ」をビューローに開示するよう命じた。ドイツ行政府におけるこのような重要な情報の交換は、ビスマルク時代以来、極限られていたから、これは興味深いことであった。しかし、最終的にビュッセルは、1905年2月、ヴィルヘルムへの報告書の中で、彼が遂行している性急な戦争準備についての重大な問題を提起した。ビュッセルは、英国を攻撃可能なのは海軍のみであり、フランスが英国と同盟しようとするでなかつと、その海軍が必要とするデンマークの領地を獲得するためには陸軍の支援が必要だということを強調したのだった。その中で、彼はこんな不吉な記述をした。「ヨーロッパ大陸で英国の同盟国を排除することでしばらくの間は食べていけるとしても、英国の意思に対応しなければならぬ日が先送りになるだけのことである。直接対決は、結局、避けることはできないのである<sup>58</sup>。」これはつまり、フランスの資源を奪取できるか否かにかかわらず、英国を攻撃できるか否かが問題であるということで、その英国との戦いに「勝利」することは、ありそうになかったのである。ヴィルヘルムは、ビュッセルの報告書の裏を明らかに読み取り、数日後、ビュッセルに望んでいた陸軍の支援は期待するなどと発言した<sup>59</sup>。そればかりではなく、ヴィルヘルムは、しばらくの間は英国との戦争を避けたほうが良いとの意見も示した<sup>60</sup>。

他方、海軍内部においても英国への対抗策についての意見の不一致が見え始めた。北海基地司令官と艦隊司令官は皇帝との「直接謁見」の特権を持っていたが、両者とも北海戦略とビュッセルの計画が相反すると主張した。日露戦争におけるロシアの例も挙げて、防御のために事実上受身となった艦隊は、断固とした次の行動に出られないと説明し、戦争を開始するならできるだけ早い方が良いと述べたのである<sup>61</sup>。しかし、こうした提案も、必ずしもドイツ側に明るい展望を示すものではなかった。11月にはティルピッツ自身も海軍部内で状況判断と政策提言を行う委員会を立ち上げた。委員会の結論はティルピッツの望むものでは決してなかった。委員会は艦隊の準備を整えるためのいくつかの段階を提案した。これもまた、日露戦争でのロシアの悲惨な結末を受けてのものだった。委員会は、ロシアの失敗の主因は準備不足にあると見ていたので、建艦用に割り当てられていた予算を、戦争準備体制の確立に振り分けるよう提言した。しかしティルピッツは、彼の「神聖なる」建艦計画を少しも犠牲にすることは望まなかった<sup>62</sup>。

<sup>58</sup> BA-MA, F 5586, Schlieffen to Büchsel, 04.02.1905. Lambi, *Navy and German Power Politics*, p. 254をあわせて参照。

<sup>59</sup> Ibid., Senden to Büchsel, 07.02.1905.

<sup>60</sup> Lambi, *Navy and German Power Politics*, p. 156.

<sup>61</sup> BA-MA, F 2044, Gedanken über die augenblickliche kritische Lage, 03.12.1904. 著者であるベンデマン提督は、ビュッセルの前任者の一人。Koesters memorandum in Ibid., F 5587, Koester to Büchsel, 17.02.1905.

<sup>62</sup> BA-MA, F 2044, Schlussvotum des Vorsitzenden der R-Kommission, 14.12.1904.

1905年2月の、ヴィルヘルムによる英国に対する戦いの準備を据え置くとの決定により、英国との即時開戦の危険は回避されたかに見えたが、一方で2つの点が明らかになった。帝国の意思決定レベルにおいて、皇帝を含めた大多数が、現在の海軍力は対英戦において事実上役に立たないと見ているということ、そしてこのような戦争に「勝ち目はない」ということであった。さらに悪いことに、ティルピッツとビュッセルとの相反する立場から、海軍上層部の意見の相違も明確化した。それは、開戦への危険が高まる中で行われた海軍部内の会議でより鮮明となり、これはドイツ帝国海軍が英国との戦争に対する実行可能な概念を持っていないこと、そして意見をまとめる拠り所さえないことを表していた。帝国の意思決定レベルも構造上同じような問題を抱えていた。十分な情報交換のために必要な具体的な手順が確立されておらず、適切な政治判断が難しくなっていたのである。

この問題は、日露戦争開戦直後から行われた海軍計画の変更においてさらに顕著になった。1904年11月までに、日露戦争の影響を視野に入れて露仏同盟に対抗する計画が再考された。ロシアの海軍力は極東で著しく無力化されたため、ロシアは最早フランスにとって価値ある同盟国とは考えられなかった。その一方で、フランスと戦争を開始した場合、地中海でイタリアはおそらく当てになりそうになかったにもかかわらず、ドイツはフランス北部の各港に対して攻撃を行えると強気であった。彼らは、日露戦争がもたらしている他の影響についてあまりにも無頓着であった。というのも、ロシア第二太平洋艦隊にドイツが石炭を供給していた事実およびドッガーバンク事件をきっかけとして、英国とドイツの関係は戦争の危機にまで高まっていたにもかかわらず、ドイツ海軍の作戦立案者は、それまでの給炭の経験から、英仏海峡におけるドイツ海軍の作戦に、英国からの石炭供給という支援が得られるであろうと結論付けていたのである。対フランス作戦を実行する上で英国の友好的中立は必須条件であったが、その期待はこのとき、明らかに現実離れしていたのである<sup>63</sup>。

しかし、英国に対する計画を政治的な現実に当てはめて考えなければいけないことに海軍軍令部の幹部達が気づいたのは、日露戦争勃発からかなりときがたってからであった。英国とフランスの再接近、および日露戦争における日本軍の勝利によるロシア軍部と海軍力の弱体化は、ドイツと英仏同盟間の戦争勃発の可能性をさらに高めた<sup>64</sup>。ビュッセルは、これを陸軍が二正面戦争を戦う必要がなくなった機会と捉え、そして10月21日のドッガーバンク事件発生により、前述のような決断をヴィルヘルムに迫ったの

<sup>63</sup> BA-MA, F 5597, Denkschrift über die Kriegführung zur See gegen Frankreich in den Kriegsfällen: Dreibund gegen Zweibund und Deutschland gegen Frankreich im Jahre 1905; Steinberg, Germany and the Russo-Japanese War, p. 1976f.

<sup>64</sup> BA-MA, F 5587, Übersicht über die Entwicklung unseres O.P.II. 03.10.1904.

である。ヴィルヘルムはニコライに対し同盟を提案したが、それはご破算となり、1905年2月のヴィルヘルムによる計画撤回宣言の後は、このジレンマを解決するための緊急の対策は取られなかった。対英作戦計画は未決のままとなった<sup>65</sup>。

対米作戦については、ドイツ海軍作戦立案者はこれまでにすでに確認していた問題点を日露戦争から痛烈に思い知らされた。つまり、こうした計画は欧州の状況次第ということなのである。日露戦争、特にドッガバンク事件の副産物として発生した戦争の危機の経験により、ドイツは、米国と戦争する場合、英国およびフランスをも相手にしなければならないはずで、この際、遙か彼方の米国水域に軍隊を輸送して作戦を実行するのは、まさに不可能ということことは明らかであった。したがって、1906年5月、ビュッセルは「作戦計画 III」の計画中止も命じた<sup>66</sup>。

日露戦争中、まだ日本海海戦が起こる前の段階で、極東のドイツ巡洋艦戦隊は、万が一、日本と戦争になった場合、青島に引きこもり、その防衛を支援し、ドイツ戦闘艦隊の到着を待つようにとの命令を受けていた<sup>67</sup>。日露戦争が終わり、日英同盟が更新されると、ドイツの作戦立案者は、日本との戦争が勃発しても、それはおそらく英国との同盟関係下のものだろうと予測した。よって、その主戦場は欧州海域であり、極東海域の重要性は二次的なものになると判断した。ドイツ戦闘艦隊は青島救援のために出航すらない計画で、しかも全くこのシナリオ通りのことが、第一次世界大戦で生じたのであった<sup>68</sup>。

## 結論

日露戦争により、ドイツ海軍は日本を一目置くべき海軍国であり、高度に訓練され、士気も高く、艦隊の最新技術を見事に使いこなす能力を持っていると認識するようになった。実際、この戦争における日本海軍の近代性は、明らかにロシア海軍、ひいてはドイツ海軍をも上回るものだった。これは無線通信のような近代技術の使用のみにとどまらず、訓練や新兵募集の面でも言えることだった。日本海軍の多くの士官と乗組員は同じような社会の出身であるのに対して、ロシアやドイツの士官の事情は、かなり異なっていた。1905年時点のロシア、または第一次世界大戦末期ごろのドイツで見られた社

<sup>65</sup> BA-MA, F 5586, Büchsel to Schlieffen, 02.11.1904.

<sup>66</sup> Lambi, *Navy and German Power Politics*, p. 231. 著者は、日露戦争後の移り行く政治情勢の中、「作戦計画 III」ははじめに提起されてから1906年に中止されるまで変更がなかったとしている。これは、ドイツ作戦立案者にとって、この作戦の優先度が低く、対米戦という構想の現実性が薄かったことを如実に示すものだろう。

<sup>67</sup> BA-MA, F 5170, Allerhöchste Befehle an S.M. Schiffe im Ausland für den Kriegsfall, 27.02.1905.

<sup>68</sup> BA-MA, F 2017, Denkschrift zu den Allerhöchsten Befehlen an S.M. Schiffe auf der ostasiatischen und australischen Station, 06.03.1906.

会的緊張に関連する問題は、日本海軍には全く見られなかった<sup>69</sup>。厳格な成果主義の採用により、日本人は訓練に励むようになり、これが勝利の基礎となっていた。これは、生まれたときから階級が付いて回る社会と比較して大きな違いであった<sup>70</sup>。

しかしながら、主な技術的教訓は、ドイツの分析官の予想どおりであった。海戦における主要な要素は戦艦であり、戦艦の装甲の改善、特に船体の水面下部分を砲弾や機雷から保護する対策が必要であると結論づけられた。機雷は深刻な脅威であり、ドイツ海軍は必要に応じて独立した機雷除去部隊の創設が必要と判断した。海軍軍令部においては巡洋艦戦の分析にも特に力を入れていた。海戦において巡洋艦を常に第二の手段とし、敵を打ち破る戦力とはならないと見ていたドイツ海軍であったが、一握りのロシア巡洋艦が達成した多大な功績を見逃さなかった。9年後、ドイツ海軍指導部は、この「第二の手段」がドイツ海軍の主力になることに気づくのである。英国海軍が封鎖作戦をとり、決戦に持ち込む意思がない中で、ドイツ戦闘艦隊にはなすべきことがなくなり、巡洋艦および U ボートによる戦いが難攻不落な敵軍への切り札となった。日露戦争で得た巡洋艦戦に関する情報は、ドイツがこの9年後の戦争の開戦前に得られた比較的新しい唯一の実戦情報であった。これが第一次世界大戦におけるドイツの作戦にどう影響したかは、興味深い今後の検討課題である。ドイツ帝国海軍は、主な敵対国である英国に対する実行可能な戦略を欠いたまま、この戦争に突入した。この欠落は、日露戦争の状況下ですでに十分明らかになっていたが、ドイツの立憲君主制度による重大な組織的欠陥のため、ドイツ人はそれを立て直すことができなかった（後に日本も同じような問題に直面するようになる）<sup>71</sup>。しかし、おそらく最も重要な結果は、日本海軍が有能で強力な軍隊としてドイツ海軍からの尊敬を勝ち得たことであろう。これは、第一次世界大戦直後の両国のほとんど驚きとも言える協力関係の重要な要素となったのであり、さらに、ゆくゆくは同盟海軍として英米海軍に対抗していく素地を作ることになった。

## 参考文献

Admiralstab der Marine, Der Krieg zwischen Rußland und Japan 1904-05: Part one (Berlin 1906); Bis zum Ansetzen des Landangriffs auf Port Arthur im Mai 1904;

<sup>69</sup> ドイツ側の事情については、Herwig *das Elitekorps des Kaisers* を参照のこと。

<sup>70</sup> ケネディ博士は、以下のように指摘している。「ロシア軍は伝統的に、退役後の農奴制度への反抗の懸念から、新兵に徹底的に訓練を施すということはず、また長期間軍隊にとどめて置く傾向があった。その代わり、ロシア指揮官は「人海戦術」に頼りがちになり、海戦のようなハイテクを使用した戦いにはほとんど役に立たなかった（Kennedy, *Aufstieg und Fall der großen Mächte*, p. 272）。

<sup>71</sup> 文末に参考文献として掲げたBaudisとScheerersの論文を参照。

- Part two ( Berlin 1908 ) : Bis zur Kapitulation von Port Arthur; Part three ( Berlin 1909 ) : Die Schlacht von Tsuschima und das Ende des Krieges
- Baudis, Dieter; Deutschland und Großbritannien in der Zeit des Ersten Weltkrieges. Versuch einer vergleichenden Betrachtung einiger Aspekte der wirtschaftlichen und sozialen Entwicklung. in: Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte 1981/III, p. 49-78
- Baudis, Dieter; Deutschland und Großbritannien in der Zeit des Ersten Weltkrieges. Statistische Ergänzungen zur vergleichenden Betrachtung der wirtschaftlichen und sozialen Entwicklung. in: Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte 1981/IV, p. 205-216
- Berghahn, Volker R.; Der Tirpitzplan. Genesis und Verfall einer innenpolitischen Krisenstrategie unter Wilhelm II, Düsseldorf 1971
- Freiherr von Maltzahn, Curt; Der Seekrieg zwischen Rußland und Japan 1904 bis 1905. 3 vols., Berlin 1912-1914
- Herwig, Holger H.; *Politics of Frustration: The United States in German Naval Planning, 1889-1941*, Boston 1976
- Herwig, Holger H.; Das Elitekorps des Kaisers: die Marineoffiziere im Wilhelminischen Deutschland, Hamburg 1977
- Jukes , Geoffrey; *The Russo-Japanese War 1904-1905*, Oxford 2002
- Kennedy, Paul M.; *Aufstieg und Fall der großen Mächte: ökonomischer Wandel und militärischer Konflikt von 1500 bis 2000*, Frankfurt a. M 1991
- Lambi, Ivo Nikolai; *The Navy and German Power Politics, 1862-1914*, Winchester, Mass. 1984
- Militärgeschichtliches Forschungsamt (Editor); *Deutsche Militärgeschichte, 1648-1939*, 6 vols., München 1983
- Raulff, Heiner; *Zwischen Machtpolitik und Imperialismus: Die deutsche Frankreichpolitik 1904-06*, Düsseldorf 1976
- Scheerer, Thomas; *Die Marineoffiziere der Kaiserlichen Marine. Sozialisation und Konflikte*, Hamburg (diss.) 1993
- Steinberg, Jonathan; "Germany and the Russo-Japanese War", *American Historical Review* 75 (1970) No. 7, pp. 1965-1986
- Tirpitz, Alfred von; *Erinnerungen*, Leipzig 1920

BA-MA = Bundesarchiv-Militärarchiv ( ドイツ連邦軍公文書館 )

PAAA = Politisches Archiv des Auswärtigen Amtes ( ドイツ外務省公文書館 )